

見本

実践を創造する

演習・保育内容総論

第3版

見本

まえがき

幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園で行われる保育・教育の内容は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（いずれも2017年改訂・改正）によって告示されています。要領・指針には、それぞれの施設の社会的役割が明記されるとともに、人生の中での乳幼児期の重要性が強調されています。また、小学校以上の学習指導要領の改訂と相まって、幼児教育への期待がますます大きくなり、小学校教育への連携・接続も強調されています。

今、日本では、多くの乳幼児が幼稚園や保育所等の家庭外施設を利用し、発達を促す教育を受けています。園（所）で展開される保育内容にはどのようなものがあるのか、それは子どもの発達にとってどのような意義を持つのか、また、個々の保育内容はどのような方法によって実践されるのかについて学ぶのが、「保育内容総論」という科目です。また、歴史や外国の保育内容にも目を向け、視野を広めます。

少子化が急速に進み、家庭の教育力が低下し、地域の人間関係が希薄になっている今日、幼稚園や保育所等では子どもたちが幅広い活動を経験し、さまざまな人たちとかわり、生活を豊かにしていく保育が求められます。また、園（所）を利用している子どもの保護者支援も欠かせない保育内容の一つです。家庭や地域との連携を保育内容としてどう実践していくのかは、新しい課題でもあります。外国にルーツをもつ子どもの保育も重要な課題です。情報化社会が進行する中で、園（所）でも情報機器を活用した保育内容の工夫も求められる時代です。

本書は、保育を学ぶ学生のみなさんが乳幼児を取り巻くさまざまな課題を理解しつつ、幼稚園・保育所・認定こども園等における保育内容を総合的に学び、保育を実践していくための手がかりとなるテキストとして活用されることを願っています。本書では資料や事例を多く取り上げていますが、これは学習者が事前学習を通してレポート作成や疑問点の整理を行い、毎回の授業に主体的かつ有意義に参加できるよう配慮したためです。同時に、保育の現場で活躍されている保育者の方たちにも「役立つ本」として、多様化社会における保育の課題に迫るための“保育内容再考の手引き”となることを願っています。

第3版の発行に際し、これまでの執筆者の一部に代わって、保育者養成校で現在活躍されている先生方のお力をお借りして内容を改善しました。関係各位にお礼申し上げます。本書が乳幼児の保育・教育の課題に対応し、新たな保育の実践を切り開いていくために専門的知識や技術、保育の構想力を培うことに役立てられることを期待しています。

2026年3月

編者 豊 田 和 子

もくじ

まえがき

第1章 子どもを取り巻く環境の変化とこれからの保育内容 …10

1 乳幼児を取り巻く社会環境の変化 ……10

1. 加速する超少子化社会 10
2. 進展する情報化社会 11
3. 核家族の広がり、家庭の多様化 12

2 指針・要領等の保育内容の考え方ー全体構造と保育内容ー ……13

1. 幼稚園教育要領、保育所保育指針、
幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全体構造 13
2. 保育内容の基本的な考え方 15

3 幼児期の教育（学び）の新たな課題とその背景 ……16

1. 「育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」 16
2. 幼児期の「学び」への期待 19

第2章 保育所・幼稚園・認定こども園の役割 ……21

1 養護と教育 ……21

1. 保育としての養護と教育 21
2. 保育における教育とは 22
3. 養護と教育は一体的に行われる 22
4. 保育における養護とは 22

2 保育所の役割 ……23

1. 児童福祉施設としての保育所 23
2. 教育を行う施設としての保育所 24
3. 保育所の役割、保育士の役割 25
4. 保育所の社会的責任 27

3 幼稚園の役割 ……28

1. 学校教育としての幼稚園の役割 28
2. 重視される幼児教育 28
3. 保育内容の多様性 29
4. 保育内容の総合性 29

4 認定こども園の役割 ……30

1. 認定こども園とは 30
2. 認定こども園はどのようにして誕生してきたか 30
3. 認定こども園における保育 31

- 4. 認定こども園における保育への配慮 31
- 5. 認定こども園への期待 32

第3章 保育の基本と保育内容34

1 乳幼児期にふさわしい生活34

- 1. 安心できる保育者がいる生活 34
- 2. 多様な遊びが繰り広げられる保育環境 35

2 遊びを通しての指導36

- 1. 遊びは子どもの成長を支える学び 36
- 2. 幼児期の遊びと園での体験 37
- 3. 発達過程に応じた「自ら選んでする遊び」 38
- 4. 遊びの内的価値と発達の連続性 39

3 環境を通しての指導40

- 1. 保育における「環境」の意味 40
- 2. 生活と遊びを支える環境構成 41
- 3. 年齢別に見る環境作りの実践 43
- 4. 環境を構成する専門性と保育の本質 44

4 領域の考え方45

- 1. 保育内容と領域の関係 45
- 2. 保育内容となる活動はどのようなものか 45

第4章 保育内容を展開するプロセス47

1 「目標－内容－方法」という方法原理から47

2 全体的な計画とカリキュラム49

- 1. 保育所における「全体的な計画」について 49
- 2. 幼稚園における「全体的な計画」と教育課程 50
- 3. 幼保連携型認定こども園における「全体的な計画」と教育課程 51
- 4. カリキュラム・マネジメントの考え方 51
- 5. カリキュラムと指導計画の関係 52

3 「内容の取扱い」と子どもの理解53

- 1. 保育の内容を充実させること 53
- 2. 保育における「子ども理解」 55

4 保育の計画と評価・反省57

- 1. 反省・評価の意義 57
- 2. 評価の種類と方法 58

第5章 乳児（1歳未満児）の保育内容61

1 乳児（1歳未満児）の発達特徴61

1. 誕生から生後6か月未満 61
2. 生後6か月から1歳未満 62

2 保育内容の基本的事項63

1. 応答的な保育 63
2. 乳児期の保育の3つの視点 63
3. 養護と教育の一体化 64

3 乳児（1歳未満児）の保育内容のポイントーねらいと内容ー64

1. 「健やかに伸び伸びと育つ」ことができるような配慮 65
2. 「身近な人と気持ちを通じ合う」ことができるような配慮 65
3. 身近なものに関わり感性が育つ」ような配慮 65

4 保育の事例と指導計画66

1. 乳児（1歳未満児）の事例と指導計画 66
2. 乳児（1歳未満児）クラスにおける遊び 68

第6章 1歳以上3歳未満児の保育内容71

1 1歳以上3歳未満児の発達特徴71

1. 1歳から2歳未満児 71
2. 2歳から3歳未満児 72

2 保育内容の基本的事項74

3 1歳以上3歳未満児の保育内容のポイントーねらいと内容ー75

1. 1歳児の保育内容 75
2. 2歳児の保育内容 77

4 保育の事例と指導計画79

1. 1歳児の事例と指導計画 79
2. 2歳児の事例と指導計画 82

第7章 3歳以上児の保育内容85

1 3歳以上児の発達特徴85

1. 3歳児 86
2. 4歳児 86
3. 5歳児 87

2 保育内容の基本的事項87

3 保育の事例と保育の計画90

見本

1. 3歳児の事例と教育課程 90
2. 4歳児の事例と活動計画 92
3. 5歳児の事例と食育計画 96

第8章 幼児教育と小学校教育を円滑に接続する保育内容 …99

- 1 幼児教育と小学校教育の接続の意義 ……99
- 2 幼児期と学童期における「学び」の特徴 …… 100
 1. 「幼児期」と「学童期」 100
 2. 「幼児期」の学びと「学童期」の学び 100
- 3 保育内容としての交流活動 …… 101
 1. 幼稚園・保育所等と小学校の連携 101
 2. 交流活動の意義や課題 101
- 4 「架け橋期」（5歳児から小学校1年生までの2年間）のカリキュラム … 103
 1. 「保幼小の架け橋プログラム」について 103
 2. 「架け橋期」のカリキュラムを考える 103
 3. アプローチカリキュラムの定義と事例 105
 4. スタートカリキュラムの定義と事例 106
- 5 まとめと課題 …… 107

第9章 異年齢児の保育内容 …… 109

- 1 異年齢保育の意義 …… 109
 1. さまざまな人とのかかわり 109
 2. 仲間として 110
 3. 同年齢での活動 111
 4. 見通しを持って 111
- 2 異年齢保育においてめざす子ども像 …… 112
 1. 3歳児にとって 112
 2. 4歳児にとって 113
 3. 5歳児にとって 113
- 3 異年齢保育の保育内容のポイント …… 113
 1. 異年齢保育の保育内容 114
 2. 保育者としての配慮と援助 119
- 4 保育の事例と考察 …… 119
 1. 生活発表会の事例 119
 2. 延長保育の事例 120

第10章 子育て支援を創造する保育内容 122

1 子育ての現状と支援の体制－家族形態の変化と母親の子育ての負担－ ... 122

2 保育所・幼稚園等に求められる子育て支援 123

1. 保育所における子育て支援 123
2. 幼稚園における子育て支援 124
3. 幼保連携型認定こども園における子育て支援 126

3 子育て支援の実践事例と考察 127

1. 保育所の事例－地域子育て支援センター－ 127
2. 幼稚園の事例 129

第11章 地域社会やICTを活用した保育内容 131

1 子どもの育ちと地域社会のかかわり 131

1. 子どもの育ちの変化と地域社会の教育力の低下 131
2. 子どもの育ちと地域社会 132
3. 保育所・幼稚園等に期待される地域資源の活用 133

2 地域の自然や人材を活用した保育内容 134

1. 地域の自然を保育に生かす 134
2. 地域の人材を保育に生かす 136

3 ICTの広がり子ども 138

1. ICTの広がり子どもの育ち 138
2. 保育現場におけるICTの導入・活用 139

4 保育現場におけるICTの活用 139

1. 保育現場におけるICTの活用と留意点 139
2. 保育実践におけるICT活用の可能性 140

第12章 わが国における保育内容の変遷 142

1 戦前の保育内容 142

1. 明治前期の保育内容 142
2. 明治後期の保育内容 143
3. 大正期の保育内容 145
4. 昭和前期の保育内容 146

2 戦後の保育内容 148

1. 昭和期の保育内容 148
2. 平成期の保育内容 150
3. こども家庭庁の発足とこれからの保育内容 152

第13章 諸外国の保育内容 154

1 保育をめぐる世界の動向 154

1. 世界の動向 154
2. 2つの大きな流れ 155

2 2つのタイプを代表するカリキュラム 157

1. レッジョ・エミリア・アプローチ（イタリア）－子どもの言葉の傾聴－ 157
2. テ・ファーリキ（ニュージーランド）－すべての人の足場となる織物－ 158
3. フランスの幼児学校（エコール・マテルネル） 159
4. 5歳児の義務教育をめざす韓国（大韓民国） 160

3 そのほかのカリキュラムなど 162

1. ピラミッド・プログラム（オランダ） 162
2. フォレスト・スクール（森の幼稚園） 163

第14章 これからの保育内容の課題 166

1 特別な配慮を必要とする子どもの保育内容 166

1. 発達障害 166
2. 虐待や貧困問題のある家庭 168
3. 医療的ケア児 168

2 多文化共生の保育内容 169

1. 多文化共生の保育が求められる背景 169
2. 幼稚園教育要領、保育所保育指針、
幼保連携型認定こども園教育・保育要領に見られる多文化共生の保育 170
3. 多文化共生をめざす保育の内容 171
4. これからの課題－保育者に求められること－ 173

3 子どもの命と安全を守るための保育内容 174

1. 災害への備え 174
2. 乳幼児期の食育を進める保育内容 176

索引 179

第1章

子どもを取り巻く 環境の変化と これからの保育内容

学習のポイント

- 乳幼児を取り巻く社会状況の変化に目を向けよう。
- 保育所、幼稚園、認定こども園等で行われる保育内容とはどのようなものかを知ろう。
- 幼児期の教育の新しい課題やその考え方について理解しよう。

1 乳幼児を取り巻く社会環境の変化

1-1 加速する超少子化社会

この40数年間わが国の子どもの数（15歳未満人口、以下同じ）は、毎年減り続けている。総務省統計局によると、2025（令和7）年4月1日現在の子どもの概数は1,366万人で過去最少となった。総人口における子どもの割合は、75年前の1950（昭和25）年には35%を超えていたが、1990（平成2）年には20%を切り、2024（令和6）年には約11%で過去最低となった（表1-1）。日本人は9～10人のうち1人しか子どもがいないことになる。厚生労働省の調査では、2024年に生まれた日本人の子どもの数は68万6,000人余りで、統計をとり始めて以来初めて70万人を切り、一人の女性が産む子どもの数の指標となる合計特殊出生率は過

表1-1 わが国の総人口に占める
子どもの割合推移

1950年	35.4%
1975年	24.3%
1990年	18.2%
2010年	13.1%
2024年	11.3%

表1-2 主要国の子どもの割合

韓国	11.2%
ドイツ	14.0%
中国	16.8%
フランス	17.0%
アメリカ	17.7%

出典：総務省統計局「人口推計」2024年より作成

- ・ 共働き家庭は毎日が忙しく、子どもとゆっくりかかわる時間が持てない。

これからの保育施設では、今まで以上にきめ細かな保護者支援・連携が必要になってくる。保育内容の面では、子どもが園で過ごす時間帯だけを想定した保育内容ではなく家庭生活の実情を考慮し、地域や家庭と連携した24時間の健全な生活を作っていけるような内容の工夫が求められるだろう。

2 指針・要領等の保育内容の考え方 ー全体構造と保育内容ー

子どもや家庭を取り巻く社会環境が目まぐるしく変化していることを受けて、乳幼児期の保育・教育の公的な施設としての保育所・幼稚園・認定こども園等に対して、多様な保育ニーズ及び新しい時代の教育的期待に対応できるよう一層の充実と質の向上が求められている。

ここでは、現行の保育所保育指針・幼稚園教育要領等で示されている保育内容の基本的な考え方とその全体的構造を概述しておく。

1 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の全体構造

日本の保育・幼児教育施設の保育内容を国レベルで示す「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」のいわゆる3文書が、同じ時期（2017〔平成29〕年度）にあらためられ、その基本的な内容もできるだけ同一にするという方向が示された。本書の第2章で述べるように、幼稚園・保育所・認定こども園という3つのタイプの保育・幼児教育施設はそれぞれの所管が異なるし、関連法も同じではない。各々は固有の社会的任務を担っている施設であるが、社会環境の変化や時代の要請を受けて幼児教育への期待が高まってきたことなどを反映して、この3つの施設での保育内容は基本的には同等・対等に扱われるようになっている。とりわけ0歳児から就学前までの教育については、生涯にわたる学びにとって重要な意義を持つこと、小学校以降の教育との接続を実現することなどが強調されている。子育て支援や地域連携なども基本的には同じような考えのもとで扱われている。表1-4 (p.14) は各文書の全体構造(目次)である。

121 保育内容の基本的な考え方

上記の指針・要領等では、どのようなことが保育内容として示されているか、基本的な事項にはどのようなことがあるのか、それを理解しておきたい。

「保育内容」というと、指針や要領等の「第2章 保育の内容」のか所で示されている内容領域やねらいを想定するかもしれないが、保育内容には、それだけでなくもっと広い意味で保育所・幼稚園・認定こども園等で保育を組織的に計画し実施していくための保育計画や教育課程編成のもとになるような広範な事項がある。以下では、保育内容の考え方の基本について、指針・要領等で示されている主なものをあげてみる。具体的には本書の第3章以降で詳しく述べられるので、その基本として理解しておくとうい。

(1) 乳児期からの保育の質を確保し、向上させる保育内容の工夫

特に保育所・認定こども園では0歳からの乳児の就園が増加していることから、一人一人の子どもに対応した保育内容を提供することにより、この時期の保育をきめ細かく丁寧に行うこと、とりわけ3歳未満児では養護と教育が一体的に展開される保育内容の工夫が求められている。

(2) 3・4・5歳児の幼児教育では、「教育」にかかわる側面での内容が3つの施設で整合化されている

幼稚園でも保育所でも幼保連携型認定こども園でも共通して3歳以上は「幼児教育」の場であり、小学校教育以降の学びにつながることが強調されている。就学前の年長組では小学校への架け橋として滑らかな接続を行えるような保育内容の工夫が求められている。知識や技能の量的な学力を追求するのではなく、「どのように学ぶか」という観点に立つ「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」の探求が幼児期の教育でも求められている。

(3) 保育で指導・援助すべき内容・ねらい

保育は養護と教育が一体となって展開されるものであるが、3歳以上の保育・幼児教育では、5つの領域(健康、人間関係、環境、言葉、表現)が共通して「保育のねらい及び内容」として取り扱われ、保育所と幼保連携型認定こども園では、1歳以上3歳未満児の保育の内容として、同じく5領域が扱われることになる。また、乳児保育(0歳児の保育)では、5領域に代わって、3つの視点でねらいと内容が示されている。

見本

(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)

3つの「資質・能力」が「生きる力」の縦軸を貫く柱であるとすれば、就学前という時期に焦点をあてて横軸で示されたのが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。5領域などの保育内容を乳幼児期の年齢や発達を踏まえて積み重ねることによって資質・能力が育まれ、「5歳児後半」または「卒園を迎える年度の後半」までに「育ってほしい具体的な姿」として10項目で示されている。これらの「育ってほしい姿」は、小学校に入学した後に円滑に接続されるよう就学前の施設と小学校の教育の両方で共有されることが望まれている。したがって、これら10の姿は、幼児期の教育と小学校の教育を結び、子どもの学習を滑らかに接続していくためのキーワードでもある。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）

- | | | | | |
|----------|---------------|-----------------------|---------------|------------|
| ①健康な心と体 | ②自立心 | ③協同性 | ④道徳性・規範意識の芽生え | ⑤社会生活との関わり |
| ⑥思考力の芽生え | ⑦自然との関わり・生命尊重 | ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 | ⑨言葉による伝え合い | ⑩豊かな感性と表現 |

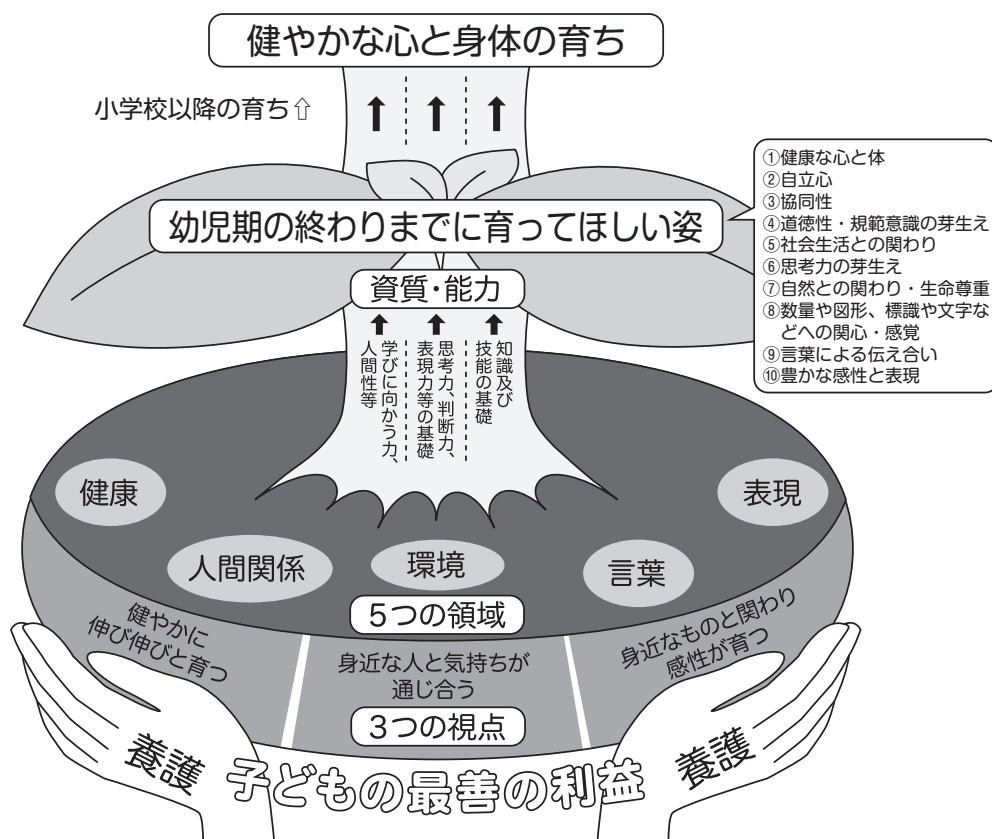


図1-2 保育の目標と内容の関連（イメージ）

出典：豊田和子編『実践を創造する 保育原理〔第3版〕』みらい 2025年 p.135

見本

不可能な時代にあっては、従来の学習方法の中心であった暗記型の知識形成ではなく、答えのない課題に対して主体的に向き合い、他者と協働しながら課題を解決していくような対話型の学習方法が重視される。とりわけ、幼児期における学びの過程や環境を通して行われる教育では、自発的な活動としての遊びの中にこそ、自ら考え、仲間と協力して物事を解決していこうとする学びがあり、アクティブ・ラーニングへの期待が高まっている。

演習課題

- 時代が変わっても、あなたが乳幼児期の子どもたちにぜひ体験してほしいと思う遊び体験には、どのようなものがありますか。その理由も考えましょう。
- その中の1つを選んで、3つの資質・能力や10の姿と関連づけて説明してみましょう。

【参考文献】

- 文部科学省・厚生労働省・内閣府『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本』チャイルド本社 2017年
- 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成30年3月』フレーベル館
- 厚生労働省『保育所保育指針解説 平成30年3月』フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成30年3月』フレーベル館
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』東京書籍 2024年
- ジェームズ・J・ヘックマン（古草秀子訳）『幼児教育の経済学』東洋経済新報社 2015年
- 小塩真司編『非認知能力—概念・測定と教育の可能性—』北大路書房 2021年

2 遊びを通しての指導

1 遊びは子どもの成長を支える学び

子どもが最も自然に学んでいるのは遊びの中であり、遊びの中で子どもは試し、考え、工夫するなど、試行錯誤しながら自分なりの世界を広げていく。

遊びは答えが決まっていない。だからこそ、子どもは「なぜだろう」「こうしたらどうなるだろう」と探究し、創造する。遊びの中では、失敗もまた次への工夫につながり、試行錯誤の過程そのものが学びとなる。このような遊びが持つ「探究心」「創造性」「意欲」といった教育的価値について、まずは理解しておきたい。そして、遊びは子どもが気持ちを表現し、満たす場でもある。うれしさや悔しさ、不安といった感情を遊びの中で表し、整理していく過程を保育者が受け止め共感することで、子どもは安心して自己を表現し遊びに没頭できるようになる。



事例1 探究心と情緒が育つでっこ遊びの展開（4歳児クラス）

4歳児クラスで、空き箱や布を広げながら「ケーキ屋さんにしよう！」と遊びが始まった。「いらっしゃいませ！」と元気な声が響く一方で、「お金がないと買えないよ」「レジもいるよね」「スマホで買えるようにしよう」など、子どもたちは次々に考えを出し合う。紙を丸めて硬貨を作り、箱を積み上げてレジに見立て、電子決済の読み取り口を作るなど、工夫が広がっていった。途中、「わたしが店長！」「ぼくもやりたい！」と役割をめぐる言い合いになる場面もあったが、保育者がそれぞれの思いに耳を傾け、お互いの気持ちを知ることができるよう配慮すると、「じゃあ交代ね」「わたしはパティシエにする」と折り合いをつけ、再び笑顔が戻った。



この事例の遊びの過程には、子どもが自ら課題を見出し、他者とかかわりながら解決へと向かう主体的な学びが表れている。子どもが知っているケーキ屋さんに近づこうとする中で、「お金が必要」「レジがいる」といった課題が生まれ、試行錯誤しながら探究心や創造性を発揮し、遊びを深めていった。こうした姿は、社会的役割を広げつつ遊びを発展させていく過程ともいえる^{*1}。さらに、役割をめぐる葛藤から交代や折り合いをつけることを通して達成感を味わい、情緒を豊かに育てていった。保育者がその思いを受け止め安心して遊ぶことのできる環境を作ることによって、子どもは安心して自己を表現し、より深い学びへと向かっていくのである。

*1 このような遊びの過程には、第1章(p.19)で述べたアクティブ・ラーニングが見られる。

第5章

乳児（1歳未満児）の 保育内容

学習のポイント

- 乳児（1歳未満児）の心身の発達を理解しよう。
- 乳児期の保育を実践するうえでの基本的な内容を学ぼう。
- 保育者の果たすべき役割について考えよう。

1 乳児（1歳未満児）の発達特徴

保育所保育指針にみる発達の特徴

◆乳児（1歳未満児）の発達の特徴

運動面では、全身を活発に動かすことから始まり、次第に握る・つまむなど指先の操作性が高まる。認知面では自分自身や周囲の人やものに興味を示し、「何だろう？」と探索活動が活発になる。それを通して自分と自分の周りの環境を理解していく。情緒面では特定の人に愛着関係を築くことで安心して生活できる。言葉によるコミュニケーションの芽生えとして、9か月頃から身近な大人に指差しや身振りで自分の欲求や思いを伝えようとする姿が見られる。人見知りも見られる。

11 誕生から生後6か月未満

誕生したばかりの赤ちゃんは大人の世話なしで生きていくことができず、私たちに非常に無力な存在だと映る。しかし、赤ちゃんには新生児反射^{*1}といわれる外から受けた刺激に対して敏感に反応する力があり、将来自分自身や周りの人とのかわりにとって重要な力となるものを備えて生まれてくることも事実である。例えば、私たちが赤ちゃんの手のひらに自分の指を入れると、赤ちゃんはぎゅっと握る。これは把握反射といわれる代表的な新生児反射で、自発的にものをつかむ動作の準備としての役割がある。また、赤ちゃんの唇に指で触れるとその指をリズミカルに吸う。これは吸てつ反射といわれる反射で、上手に乳を吸っ

^{*1} 新生児反射には把握反射や吸てつ反射のほか、探索反射、緊張性頸反射、モロー反射、バビンスキー反射などがあり数か月の間に消失する。消失しない場合は神経発達の異常の可能性があるため、発達診断の目安になる。

Ⅱ 乳児（1歳未満児）クラスにおける遊び

乳児期は月齢による身体機能の違いがとても大きい。また同じ月齢でも個人差はあるので月齢による発達の違いを踏まえ、子ども一人一人の発達状況に合わせて遊びを楽しむことができるようにする。

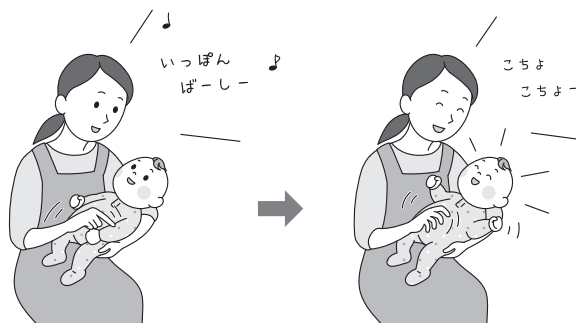
乳児期は、ものや人、人の動きなどへの好奇心が旺盛だが集中力は短いため、一つの遊びが続く時間は短いものと心得ておくといよい。しかし、保育者と一緒にかかわることで遊びが継続し充実することにつながる。保育者は複数の遊びを用意し、子どもの様子を見ながら、子どものペースと一緒に遊びを楽しむよう心がける。玩具を使う場合、市販の玩具を活用して遊ぶこともあるが、保育者自らが子どもの興味に合わせた手作り玩具も遊びを豊かにする。

●乳児（1歳未満児）クラスにおける遊びの例と留意点

ここでは、おおよその月齢にふさわしい遊びをいくつか紹介する。

（0～3か月頃）

- ・寝ている状態でも見る、聴くことで楽しめるメリーやモビールを吊るす
※メリーやモビールは吊るす高さを考慮する。乳児の真上ではなく少しずらすことで追視する力を促す。
- ・ガラガラを振ってみせる
※ガラガラは振り方や振る速さ、タイミングに工夫をする。
- ・「いっぽんばし」「ちょちょあわわ」のようなゆったりした歌を歌いながらスキンシップをとる
※スキンシップをとりながら遊ぶ際は、一部分に限定せず身体全体に触れるようにする。



4 「架け橋期」(5歳児から小学校1年生までの2年間)のカリキュラム

1 「保幼小の架け橋プログラム」について

幼児教育で育まれた子どもの資質・能力を小学校以降の教育でさらに伸ばすためには、保育者と小学校の教師たちが共通理解したうえで、子どもの学びの連続性に配慮した保育内容・教育内容が求められる。

そこで、文部科学省は、2022（令和4）年に「幼保小の架け橋プログラム」を打ち出し、全国の自治体でモデル的な取り組みが進められている。このプログラムは、「義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間」を「架け橋期」と位置づけて（図8-1）、保育者と小学校の教師のみならず、保護者や地域の人々も含めて、子どもにかかわるすべての大人が協働して、子どもの学びを支持し、学びと生活の基礎を育むことをめざす。

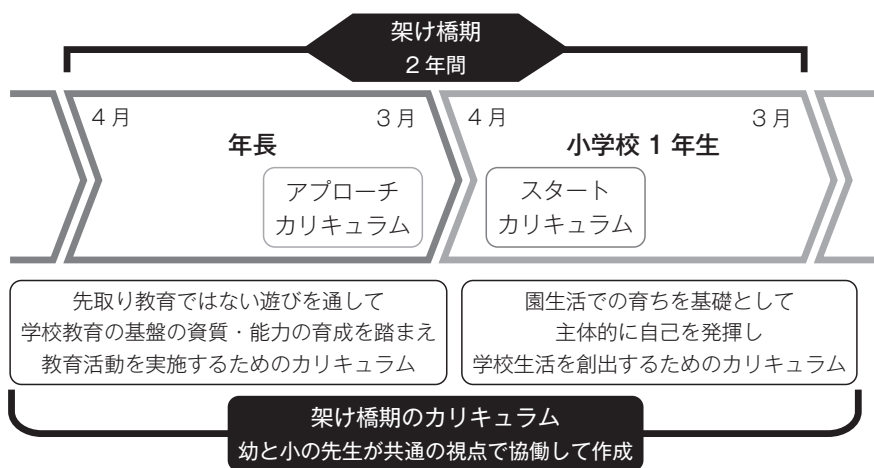


図8-1 「架け橋期」と「架け橋期のカリキュラム」

出典：文部科学省ホームページ：「つながる」2024年 pp.12-13をもとに作成
https://www.mext.go.jp/content/20241024-mxt_youji-000038497-12.pdf

2 「架け橋期」のカリキュラムを考える

「架け橋期のカリキュラム」は、保育者と小学校の教師が共通の視点で協働して作成するものであり、代表的な実践として「アプローチカリキュラム」と「スタートカリキュラム」がある。アプローチカリキュラムでは遊びを通して学校教育への接続を図り、スタートカリキュラムでは園生活の育ちを基盤に子どもが主

たカリキュラムの構築に向けた取り組みも進められている。幼保小の架け橋プログラムの実施に向けては、文部科学省による手引きや資料が公表されているため、これらを積極的に活用したい。

・ 幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？



出典：文部科学省ホームページ

※ ベネッセ「(特集) 園の遊びがもたらす幼児期の『学びの芽生え』『これからの幼児教育を考える』も参考にしたい

https://benesse.jp/berd/up_images/magazine/koreyou_2011_spring_all.pdf

・ かけがわ型 育ちと学びのジョイントブック



13 アプローチカリキュラムの定義と事例

「アプローチカリキュラム」とは、小学校の先取り教育ではなく、小学校以降の教育を見通しながら、その基盤となる資質・能力を育成することを目的とした幼児教育の実践である。文部科学省が正式に使用する用語ではないが、各自治体や園において、接続を確かなものとするために進められている取り組みの一つである。このカリキュラムでは、子どもの「学びの芽生え」を大切にしながら、主体的・対話的で深い学びへとつながる活動を意図的に構成していく。

以下に、文部科学省が公表している事例などを参考に掲載する。



事例1 シャボン玉遊び（5歳児・H保育園）¹⁾

近隣の小学校との交流会で楽しんだシャボン玉作り。「園でもやりたい!」という子どもの思いを汲み取った保育者は、洗濯のりやたらい等を準備し、子どもが自ら遊びを展開できるように環境を構成した。

子どもは「小学生みたいに作りたい」と意欲的に材料を混ぜ始めた。「洗剤とのりを多くしてみよう」「混ぜる量を変えてみる?」と試行錯誤が始まり、保育者は計量カップや記録用ボードを用意して、子どもの気付きが深まるように援助した。

やがてシャボン玉作りが成功すると、子どもたちは達成感に満ちた表情で「もっと大きいのを作りたい!」と活動を発展させていった。仲間と協力し、考えを出し合い、試行錯誤する姿は、小学校の生活科や図工、国語などの教科につながる「学びの芽生え」そのものである。



また、3・4・5歳児クラス別の保育形態では、5歳児の卒園後、春休みの2週間ほどの間に3・4歳児で過ごす異年齢クラスを設け、その中に2歳児クラスの子どもを迎え入れ、安心して移行していけるよう配慮している園もある。このように、保育者は見通しを持つことができる。

2 異年齢保育においてめざす子ども像

異年齢保育においてめざす子ども像

- さまざまな活動や遊びを通して、年上や年下の友だちとのかかわりを深めるとともに、思いやりや親しみを持てる子ども。
- 同年齢、異年齢の友だちと、多様な遊びを展開して楽しむ子ども。
- 友だちのよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう子ども。



年下の友だちへ「お茶をどうぞ」

異年齢の保育では、子どもも保育者もさまざまな人とのかかわりの中で生活するため、それぞれに応じた役割を担うことになる。ここでは異年齢保育の中で3・4・5歳児がどのように育っていくのかについて、年齢ごとに考えてみよう。

1 3歳児にとって

3歳児にとって、年上の子どもとともに過ごす生活は、どのようなものであろうか。生活面では、衣服の着脱など自分一人では難しいことを手伝ってもらったり、友だちとの玩具の取り合いで泣いているときに仲立ちしてもらったりすることもある。そのようなかかわりを通して、年上の子どもに対する安心感や親しみが育まれていく。また、年上の子どもと一緒に遊び、生活する中で、その行動や言葉を模倣することにより、社会的なスキルや生活習慣を身につけていく。一方で、遊びの中で5歳児が作った積み木のお城に触れて壊してしまったり、一緒に遊びたくてもルールのある遊びでは仲間に入れてもらえなかったりすることもある。それでも、同じ部屋で過ごす中で保育者の仲立ちや援助を受けながら、さまざまな人とのかかわりを経験していくのである。

③ 4・5歳児の遊びの保障と3歳児の仲立ち

4月も半ばになると、4・5歳児が一緒になって、ブロックや積み木、ままごとなどを意欲的に楽しむ姿が見られるようになる。3歳児も情緒が安定してくると、次第に年上の友だちの遊びにも興味を示し、じっと様子を見つめたり、遊んでいる場に入って行ったりするようになる。しかし、3歳児が4・5歳児の遊びに入ろうとすると、年上の子どもに「入ってこないで」と拒まれたり、「先生、壊されちゃう」と保育者に訴えられたりすることもある。保育者は3歳児の遊びたい思いに共感しながら、『「入れて」って言ってみようか』と言葉を添えて関係作りを支える。また、4・5歳児に対しても、年下の子どもへの言葉のかけ方やかわり方を伝える。3歳児が安心して遊びに参加できるようそばで見守り、必要に応じて仲立ちをするなど、人的環境としての役割を果たしている。

自由遊びから片づけや給食準備へと活動を切り替える場面では、遊びに区切りをつけにくい子どももいる。保育者は、3歳児が安心して排泄できるようトイレに付き添いながら、緩やかに時間の区切りを示す。同時に、5歳児を中心に片づけを行っていけるよう言葉をかける。5歳児も一番年上のお兄さん・お姉さんとして年下の子どもに片づけを促したり、一緒に片づけたりする姿を見せる。その際、保育者が「年長さん、ありがとう」「きれいになったね。助かったよ」と感謝の気持ちを伝えることで、5歳児は自分の役割を実感し、誇らしさを味わうことができる。



積み木コーナーで遊ぶ3・4・5歳児



3歳児に園服のたたみ方を教える4歳児

(2) 異年齢クラスの中での育ち合い(11月)

過ごしやすい季節となり、室内では、劇遊び「ももたろう」に使うお面を作ったり、製作コーナーではドングリを使って、こまやネックレスなど季節の遊びを楽しんだりしている。10月の運動会を終えて、それぞれの年齢の子どもたちが自然に交わりながら戸外で意欲的に遊ぶ姿が見られる。

戸外では、4・5歳児を中心に「はないちもんめ」や「だるまさんがころんだ」などのわらべうた遊びに夢中になる姿が見られる。少し前までは、保育者が一緒に参加していないと遊びが長続きしなかったが、現在では5歳児が年下の子どもにもわかるようにルールを伝えたり、遊び方を調整したりする姿が見られるようになった。年長児としての自覚が育ち、仲間と遊びを作り上げようとする姿がうかがえる。固定遊具の雲梯に手をかけてスイスイと一本抜かしを得意そうに見せる5歳児の姿に、4歳児はあこがれて5歳児に混ざって順番に並び、保育者に「先